

青年期女性の親との心理的距離と
Self-Esteemの質について (1)
— 性格特性との相関関係からの検討 —

三 田 英 二

About the psychological distance with the women's parents
and the quality of Self-Esteem

MITA Eiji

I. 問題

三田（2008）は、親との心理的な距離の違いにより、Self-Esteem（以下、SEと略記）どのように異なるかを検討した。

その結果、青年期後期群では、RSE（後述）の各得点における分散分析で、いずれも有意差が見られず、親子間の心理的な距離が異なっているにもかかわらず、SEには差異がないことが示された。しかし、成人期前期群では、RSE合計得点で、「高依存・高服従」群（後述）＜「低依存・低服従」群（後述）の有意差が見られ、「低依存・高服従」群（後述）＜「低依存・低服従」群の有意傾向も見られた。下位尺度でも、「自己矮小感」因子（後述）で「低依存・低服従」群は、他の群よりも、自己矮小感は有意（有意傾向）に低い（高SE）ことを示した。成人期前期段階では、親との心理的な距離が離れていた方がSEは高いことを示した。

青年期後期段階では、SE得点には差異はなくても、成人期前期段階になると「低依存・低服従」群だけがSE得点を有意に向上させたことは、青年期後期段階でのSEが量（得点）的には、同じでも質的には異なっていることを推測させる。特に、「高依存・高服従」群のSEと「低依存・低服従」群のSEが質的に同様とは考えにくい。

本研究の目的は、青年期後期段階でのSEの質を検討することにある。具体的には、親との心理的な距離により群分けした4群のRSE得点と性格特性との相関を取り、検討していく。

II. 方法

1. 調査対象者

本研究は、継続的に行っているものである。分析対象のデータは、この一連の分析を始めた当初（三田、2003）のものである。参考までに、青年期後期群の調査対象者について記しておく。

青年期後期群の女性（以下、青年期後期群）90名（平均年齢19.18歳、SD=.76、range18-21）を調査対象者とした。

2. 調査用具

（1）親との心理的な距離の測定およびグループ分け

前述のように、継続的に検討を行っているためグループ分けもこれまでのもの（三田、2008）と同一であるが、本稿に合わせた記載内容になるよう一部文章を修正して参考までに記載する。

加藤・高木（1980）が作成した独立意識尺度を三田（2003）が因子分析した結果を用いる。第1因子「自己決断力」（項目4、5、6、7、8、9、10、35、36）、第2因子「親への依存」（項目20、21、22、23、24、25、27、33）、第3因子「時間的展望の拡散」（項目3、13、14）、第4因子「反抗期心理」（項目28、30、31、37）、第5因子「自信の欠如による親への服従（以下「親への服従」と略記）」（項目17、18、26、29、34）の5因子が抽出されている（付録1参照）。

各項目ごと「全く自分にあてはまる」から「全く自分にあてはまらない」までの5件法により回答を求め、「全く自分にあてはまる」を5点とし、順次「全く自分にあてはまら

ない」まで4、3、2、1点として処理を行った。

なお、親に関係する項目への回答にあたっては、特に「父親に対して」あるいは「母親に対して」ということは教示せず、回答者の判断に任せた。青年期後期群での調査において、調査対象者からはこの点に関する質問は全くなかった。

親との心理的な距離を測定する項目として、このうち、第2因子「親への依存」因子と第5因子「親への服従」因子の項目を用いる。「親への依存」得点の理論上のrangeは8点から40点となる。「親への服従」得点の理論上のrangeは5点から25点となる。中央値は「親への依存」因子で、青年期後期群24点、「親への服従」因子で、青年期後期群12点となった。

因子得点の中央値をもとに、「高依存」群・「低依存」群、「高服従」群・「低服従」群に分け、分析用にさらにそれをクロスさせ、「高依存・高服従」群、「高依存・低服従」群、「低依存・高服従」群、「低依存・低服従」群の4群に分けた。その内訳をTable 1に示す。

Table 1 各群の人数

| 青年期後期群 | n |
|----------|----|
| 高依存・高服従群 | 20 |
| 高依存・低服従群 | 18 |
| 低依存・高服従群 | 18 |
| 低依存・低服従群 | 31 |

各群の合計人数が87名となっているのは、欠損値があるデータが自動的に除外されているためである。

親との心理的な距離が最も近い群を、「高依存・高服従」群とし、逆に、最も心理的に離れている群を「低依存・低服従」群とする。

(2) Self-Esteemの測定

SEを測定する用具として、Rosenberg self-esteem尺度^{註1}（以下、RSEと略記）を使用した。

今回の分析データは、前述の通り継続的に使用しているデータである。RSEについても三田（2007）で使用したものと同一である。以下は、三田（2007）の記載と重複するが、参考までに記載しておくことにする。

内的整合性係数は、RSE全体では、.810と良好な値を示した。このため、RSEは単一構造として考え使用した方が良いのかもしれない。しかし、今回調査では、より詳細に検討したいと考えているため、因子分析した結果を用いる。複数の下位因子に分かれるため内的整合性係数は低下すると考えられる。内的整合性係数の低下が危惧されるが、上述の目的のため、RSEを因子分析した結果、最も多く下位因子を抽出している三田（2000；付録2参照）の結果を今回用いることにする。第1因子「自己矮小感」（項目2、5、6、8、9）、第2因子「自負心」（項目3、4、7）、第3因子「自己肯定感」（項目1、10）となっている。今回データから内的整合性係数を算出したところ、第1因子「自己矮小感」は.756、第2因子「自負心」.618、第3因子「自己肯定感」.498であった。第1因子はある

程度の内的整合性係数の値は確保できたが、予想通り、特に項目数が少ない第3因子は低い値となった。このため、分析に当たっては、RSE全体の得点も用いて行いたいと思う。

評点は、独立意識尺度との整合性をとるため、「ほとんど思わない」から「非常にしばしば思う」までの5件法により回答を求めた。理論上の得点範囲は、RSE全体では、10点から50点となる。因子ごとでは、第1因子「自己矮小感」5点から25点、第2因子「自負心」3点から15点、第3因子「自己肯定感」2点から10点となる。高得点の方が高SEとなる。第1因子「自己矮小感」は、高得点は矮小感が弱いことを示し、低得点が矮小感が強いことを示すことになる。

(3) 性格特性の測定

市販されている矢田部ギルフォード性格検査（以下、YG検査）を用いた。YG検査は、12の性格特性（下位因子、詳細は、付録3を参照されたい）を測定するよう作成されている。下位因子得点の理論上のrangeは、0点～20点である。得点が高い方が、その性格特性が強いことになる。

なお、性格特性（下位因子）の解釈に当たっては、辻岡（2000）を参照している。

III. 結果

各群ごと、RSE合計得点と3つの下位因子、YG検査の12の下位因子との間で、相関分析（Spearmanの順位相関）を行った。その結果を、Table 2～5に示す。

Table 2 青年期後期群「高依存・高服従」群 (N=20)

| | RSE合計 | 自己矮小感 | 自負心 | 自己肯定感 |
|---------------|-----------|----------|--------|-----------|
| D (抑うつ性大) | -.572** | -.605** | -.199 | -.634*** |
| C (気分の変化大) | -.668*** | -.647*** | -.460* | -.394 |
| I (劣等感) | -.724**** | -.512* | -.512* | -.705*** |
| N (神経質) | -.546* | -.520* | -.284 | -.572** |
| O (客観的—主観的) | -.327 | -.284 | -.184 | -.223 |
| Co (協調的—非協調的) | -.467* | -.349 | -.373 | -.542* |
| Ag (攻撃性) | -.053 | -.270 | .053 | .133 |
| G (活動性) | .671*** | .652*** | .401 | .801**** |
| R (のんき) | .115 | .199 | -.193 | .441 |
| T (思考的内向—外向) | .324 | .301 | .046 | .434 |
| A (服従的—支配的) | .423 | .377 | .310 | .593** |
| S (社会的内向—外向) | .673*** | .594** | .446* | .730**** |
| A系統値 | -.019 | -.056 | -.038 | .093 |
| B系統値 | -.133 | -.140 | -.090 | -.011 |
| C系統値 | .169 | .229 | .129 | -.067 |
| D系統値 | .763**** | .651*** | .508* | .729**** |
| E系統値 | -.668*** | -.556* | -.362 | -.733**** |

*...p<.05 ***...p<.01 ****...p<.005 *****...p<.001

青年期後期群の「高依存・高服従」群では、RSE合計点とYG検査の間で、D（抑うつ性大）、C（気分の変化大）、I（劣等感）、N'（神経質）、Co（協調的—非協調的）、E系統値で有意な負の相関を示し、G（活動性）D系統値で有意な正の相関を示した。

このことは、全般的なSEは情緒的な安定・不安定でと関係していることを示している。

RSEの下位因子「自己矮小感」と「自己肯定感」は、YG検査下位因子とRSE合計得点と同様な相関関係を示したが、「自負心」因子は、C（気分の変化大）因子とI（劣等感）因子で有意な負の相関、S（社会的内向—外向）因子と有意な正の相関を示しただけであった。「自己矮小感」因子とYG検査下位因子との間で6つの有意な相関関係があり、同様に「自己肯定感」因子との間では7つの有意な相関関係があるが、「自負心」因子とでは3つの有意な相関関係しか示さなかった。

Table 3 青年期後期群「高依存・低服従」群 (N=18)

| | RSE合計 | 自己矮小感 | 自負心 | 自己肯定感 |
|--------------|-----------|-----------|--------|----------|
| D（抑うつ性大） | -.588* | -.479* | -.300 | -.516* |
| C（気分の変化大） | -.411 | -.353 | -.127 | -.533* |
| I（劣等感） | -.851**** | -.763**** | -.484* | -.660*** |
| N（神経質） | -.282 | -.367 | -.141 | -.348 |
| O（客観的—主観的） | -.359 | -.256 | -.182 | -.148 |
| Co（協調的—非協調的） | -.305 | -.227 | -.045 | -.338 |
| Ag（攻撃的） | .087 | -.159 | .509* | -.071 |
| G（活動的） | .562* | .367 | .634** | .267 |
| R（のんき） | .328 | .378 | .184 | -.020 |
| T（思考的内向—外向） | .220 | .484* | .091 | -.097 |
| A（服従的—支配的） | .713*** | .426 | .607** | .552* |
| S（社会的内向—外向） | .583* | .422 | .542* | .362 |
| A系統値 | -.160 | .127 | -.233 | .207 |
| B系統値 | .053 | -.042 | .455 | -.320 |
| C系統値 | .181 | .182 | -.087 | .211 |
| D系統値 | .744**** | .592** | .616** | .463* |
| E系統値 | -.694*** | -.543* | -.423 | -.671*** |

*...p<.05 ***...p<.01 ****...p<.005 *****...p<.001

青年期後期群の「高依存・低服従」群では、RSE合計得点との有意な相関は、D（抑うつ性大）因子とI（劣等感）因子が負の相関関係を示し、G（活動性）因子とA（服従的—支配的）因子が正の相関関係を示した。

RSE下位因子では、「自己矮小感」因子において、YG検査下位因子D（抑うつ性大）因子とI（劣等感）因子との間に有意な負の相関関係がみられただけで、他のYG検査下位因子との間では有意な相関関係はみられなかった。

RSE下位因子「自負心」因子では、YG検査下位因子I（劣等感）因子と負の相関関係がみられ、Ag（攻撃性）因子、G（活動性）因子、A（服従的—支配的）因子、S（社会的

内向－外向) 因子との間で正の相関関係がみられた。

RSE下位因子「自己肯定感」因子では、D (抑うつ性大) 因子、C (気分の変化大) 因子、I (劣等感) 因子と負の相関関係が、A (服従的－支配的) 因子と正の相関関係がみられた。

これらのことは、前述の青年期後期群の「高依存・高服従」群同様、RSEとYG検査は、情緒的な安定－不安定と関係していることを示しているが、「高依存・低服従」群の特徴としては、RSE下位因子「自負心」とYG検査下位因子との有意な相関関係が他の群よりも多くみられていることと考えられる。

Table 4 青年期後期群・「低依存・高服従」群 (N=18)

| | RSE合計 | 自己矮小感 | 自負心 | 自己肯定感 |
|---------------|----------|---------|--------|--------|
| D (抑うつ性大) | -.703*** | -.610** | -.278 | -.489* |
| C (気分の変化大) | -.474* | -.405 | -.277 | -.404 |
| I (劣等感) | -.448 | -.334 | -.267 | -.495* |
| N (神経質) | -.386 | -.355 | -.091 | -.305 |
| O (客観的－主観的) | -.416 | -.187 | -.352 | -.300 |
| Co (協調的－非協調的) | -.342 | -.434 | -.033 | -.295 |
| Ag (攻撃的) | -.122 | -.288 | .144 | -.058 |
| G (活動的) | .474* | .171 | .419 | .484* |
| R (のんき) | .168 | -.100 | .192 | .492* |
| T (思考的内向－外向) | .369 | .121 | .632** | .186 |
| A (服従的－支配的) | .103 | .183 | -.145 | .168 |
| S (社会的内向－外向) | .291 | .183 | .190 | .391 |
| A系統値 | .412 | .166 | .307 | .400 |
| B系統値 | -.478* | -.401 | -.261 | -.272 |
| C系統値 | -.053 | .252 | -.253 | -.191 |
| D系統値 | .389 | .321 | .191 | .358 |
| E系統値 | -.605** | -.365 | -.395 | -.559* |

*...p<.05 **...p<.01 ***...p<.005 ****...p<.001

青年期後期群の「低依存・高服従」群では、RSE合計得点とYG検査下位因子D (抑うつ性大) 因子、C (気分の変化大) 因子が有意な負の強い関係を示し、G (活動性) 因子と有意な正の相関関係を示した。

RSE下位因子「自己矮小感」因子とYG検査下位因子とは、D (抑うつ性大) 因子とのみ有意な負の相関関係を示しただけであった。

RSE下位因子「自負心」因子においても、YG検査下位因子T (思考的内向－外向) 因子とのみ有意な正の相関関係を示しただけであった。

RSE下位因子「自己肯定感」因子では、YG検査下位因子D (抑うつ性大) 因子、I (劣等感) 因子と有意な負の相関関係、G (活動性) 因子とR (のんき) 因子と有意な正の相

関関係を示した。

青年期後期群の「低依存・高服従」群は、SE関連因子とYG検査下位因子との有意な相関関係が少ないことが特徴と考えられる。

Table 5 青年期後期群・「低依存・低服従」群 (n=27)

| | RSE合計 | 自己矮小感 | 自負心 | 自己肯定感 |
|---------------|-----------|-----------|---------|-----------|
| D (抑うつ性大) | -.522** | -.395* | -.197 | -.641**** |
| C (気分の変化大) | -.569*** | -.467* | -.262 | -.557*** |
| I (劣等感大) | -.764**** | -.612*** | -.524** | -.714**** |
| N (神経質) | -.637**** | -.558*** | -.292 | -.569*** |
| O (客観的-主観的) | -.111 | -.137 | .100 | -.036 |
| Co (協調的-非協調的) | -.307 | -.163 | -.270 | -.237 |
| Ag (攻撃性) | .278 | .273 | .252 | .221 |
| G (活動性) | .521** | .298 | .438* | .609*** |
| R (のんき) | .072 | .096 | .069 | -.070 |
| T (思考的内向-外向) | .591*** | .490** | .340 | .479* |
| A (服従的-支配的) | .468* | .384 | .319 | .418* |
| S (社会的内向-外向) | .458* | .355 | .347 | .370 |
| A系統値 | -.091 | .073 | -.154 | -.050 |
| B系統値 | -.076 | -.209 | .215 | -.086 |
| C系統値 | .258 | .211 | .005 | .249 |
| D系統値 | .606*** | .421* | .429* | .581*** |
| E系統値 | -.701**** | -.641**** | -.378* | -.650**** |

*...p<.05 **...p<.01 ***...p<.005 ****...p<.001

青年期後期群の「低依存・低服従」群では、RSE合計得点とYG検査下位因子D (抑うつ性大) 因子、C (気分の変化大) 因子、I (劣等感) 因子、N (神経質) 因子、E系統値と有意な負の相関、G (活動性) 因子、T (思考的内向-外向) 因子、S (社会的内向-外向)、D系統値が有意な正の相関を示した。

RSE下位因子「自己矮小感」因子は、YG検査下位因子D (抑うつ性大) 因子、C (気分の変化大) 因子、I (劣等感) 因子、N (神経質) 因子、E系統値と有意な負の相関、T (思考的内向-外向) 因子、D系統値と有意な正の相関を示した。

RSE下位因子「自負心」因子では、YG検査下位因子I (劣等感) 因子とE系統値で有意な負の相関、G (活動性) 因子とD系統値で有意な正の相関が見られた。

RSE下位因子「自己肯定感」因子では、YG検査下位因子D (抑うつ性大) 因子、C (気分の変化大) 因子、I (劣等感) 因子、N (神経質) 因子、E系統値と有意な負の相関、G (活動性) 因子、T (思考的内向-外向) 因子、A (服従的-支配的) 因子、D系統値が有意な正の相関を示した。

IV. 考察

かつて、藤原（1981）は「一般にSelf-Esteemの高い個人は、内的安定度が高く、柔軟性に富み、自己をよく受容し、対人関係においても不安・緊張が低く、とらわれを持つことなく他者を受容し、自発性があり積極的で自己を自由に表現し得る、いわゆる「十分に機能する人間」ということができる。逆にSelf-Esteemの低い個人は、自己不全感が強く、対人関係における不適応感に陥ることが知られている。」(p. 86)と指摘した。本研究の結果から、多くの箇所、SE関連得点とYG検査のD系統値とE系統値との間に有意な相関関係が見られ、他の系統値とは、ほとんど有意な相関関係は見られていない。D系統値は、積極的安定型を示す値で、SE関連得点とは、正の有意な相関を示し、E系統値は、消極的不安定感を示す値で、SE関連得点と負の有意な相関を示している。これらのことは、本研究で使用しているRSE尺度の妥当性の高さを示すものと考えられる。RSE下位因子の信頼性係数は、高いものではないが、RSE合計得点の信頼性係数は、.810と良好な数値を示している。RSE合計得点に関しては、信頼性と妥当性は確保できていると考えられるが、RSE下位尺度に関しては、留保付き尺度と考え、考察を進めていきたいと思う。

本研究の目的は、青年期後期群では、RSEの各得点における分散分析で、いずれも有意差が見られず、親子間の心理的な距離が異なっても、SEには差異がないことが示され、成人期前期段階になると「低依存・低服従」群だけが、RSE関連得点を有意に高めたことに関して、青年期後期段階での各群のSEの質について検討することを目的としている。

その際、青年期後期段階における各群のRSE関連得点には、得点上差異はなくとも質的には異なるのではないかと考えたが、このことについて、三田（2008）には検討する結果がなかったため、本研究で検討することとした。このため、「低依存・低服従」群と他の3群との比較で考察を行うこととする。

また、考察の前提は、下記の通りである。

内的準拠性と自尊心が相関関係を持つ場合は、自分の行動（内的準拠性）と自尊心が連動していることを示す。すなわち、自分が選択した行動によって、自尊心が高まったり低下したりする。安定した自尊心ではなく、その都度選択した行動により、自尊心が変化することを示すと考えている。このような前提で考察を進めていきたい。

RSE下位因子の内容は次の通りである（三田、2000）。

第1因子「自己矮小感」因子は、自信のなさや自己否定的な内容、自己の萎縮感を表す項目からなっている。この因子は、得点処理上、逆転項目として処理されており、億点の高さはこのような傾向がないことを示し、得点の低さは、このような傾向が強いことを示す。

第2因子「自負心」因子は、他者に何をいわれようが自分は価値ある人間であるといった自負心を示す項目で占められている。

第3因子「自己肯定感」因子は、2項目しか含まれていないが、一般的な自己概念に伴う強い自己肯定的な評価を示す内容である。

1. 「高依存・高服従」群と「低依存・低服従」群の比較

「高依存・高服従」群（Table 2）と「低依存・低服従」群（Table 5）の相関のパターンは類似している。SEの質には、両群とも大きな差異はないことを示している。

RSE合計得点とYG検査下位因子との有意な相関は7個あり、共通する有意な相関関係は、D（抑うつ性大）、C（気分の変化大）、I（劣等感）、N（神経質）、G（活動性）、S（社会的内向－外向）の6下位因子で、異なっているのが、「高依存・高服従」群では、Co（協調的－非協調的）因子と有意な負の相関関係があり、「低依存・低服従」群では、T（思考的内向－外向）因子と有意な正の相関関係がある。全般的なSEの質に関しては、親との心理的な距離が最も離れていると考えられる両群のSEに大きな質的な差異が見られない。

RSEの下位因子とYG検査下位因子との相関関係においても大きな違いが見られない。

全般的に両群とも、内的準拠性（性格特性；YG検査下位因子）と自尊心（SE）が関連している。すなわち、自分が選択した行動と自尊心が連動していると考えられる。

留保付きの尺度と考えているRSE下位因子を見ると、「自己矮小感」因子は、両群ともYG検査下位因子と類似した相関パターンを示している。「自負心」因子とYG検査下位因子との有意な相関が両群とも少ない。逆に「自己肯定感」因子とYG検査下位因子との有意な相関を示した因子数は両群とも多い。

このように、RSE下位尺度においても、両群には、大きな差異はない。しかし、青年期後期段階から成人期前期段階にかけて、一方は、自尊心を向上させ（「低依存・低服従」群）、一方は、自尊心を向上できなかった（「高依存・高服従」群）（三田、2008）。何らかの要因が推測できる。本研究の結果からは、この両群の自尊心の質的な差異はないものと判断できるが、同様の質を持った自尊心とは、どうしても考えにくい。今後とも更なる検討を重ねていきたいと考えている。

2. 「高依存・低服従」群と「低依存・低服従」群の比較

「高依存・低服従」群と「低依存・低服従」群におけるYG検査下位因子との相関の相違の特徴は、有意な相関を示した下位因子数が異なることである。

RSE合計得点では、「高依存・低服従」群（Table 3）での有意な相関は、D（抑うつ性大）、I（劣等感）、G（活動的）、A（服従的－支配的）の4因子であるが、「低依存・低服従」群（Table 5）では、D（抑うつ性大）、C（気分の変化大）、I（劣等感）、N（神経質）、G（活動性）、T'（思考的内向－外向）、S（社会的内向－外向）の7因子と有意な相関関係が見られた。

RSE下位因子「自己矮小感」因子では、「高依存・低服従」群は、D（抑うつ性大）因子、I（劣等感）因子の2因子だけが、有意な相関関係を示しただけで、「低依存・低服従」群が5因子（D（抑うつ性大）因子、C（気分の変化大）因子、I（劣等感）因子、N（神経質）因子、T（思考的内向－外向）因子）と比べ、少ない。これとは逆に、RSE下位因子「自負心」因子では、「低依存・低服従」群が、YG検査の2下位因子（I（劣等感）因子、G（活動性）因子）としか有意な相関関係を示していないのに対し、「高依存・低服従」群は、YG検査の5下位因子（I（劣等感）因子、Ag（攻撃的）因子、G（活動性）因子、A（服従的－支配的）因子、S（社会的内向－外向）因子）と有意な相関関係を示した。「高依存・低服従」群のSEは、「他者からどのように言われようが自分には自信がある」という、ある意味「根拠のない自信」と行動指針となる内的準拠性（性格特性）が関連していることを示唆している。この群は「親への「服従」は拒否するが、親への「依存」は、

社会的に許容される、当然の状態としている」(三田、2012)と推測している。幼児的な万能感を青年期後期段階まで引きずってきている状態ではないかと考えている。「自負心」因子と内的準拠性(YG検査)が他の群と比較したとき、「高依存・低服従」群は、より多く有意な相関関係を示したことはこのためと考えられる。

あるいは、安定した自尊心ではないため、この「自負心」は、自分が選択した行動によって規定されていることを示しているとも考えられる。

3. 「低依存・高服従」群と「低依存・低服従」群の比較

「低依存・高服従」群の特徴は、「低依存・低服従」群とだけではなく、他の群と比べYG検査下位因子との有意な相関関係が少ないことである(Table 4)。

この群は、「親との親和性が高く、親からの指示等に従うのは、自信の欠如から親を外的準拠性とするのではなく、生得的な状態で、親の指示に従うのは、幼少期から継続されてきているもので、自然な所作・振る舞いになっていることを示唆する結果と考えられる。」(三田、2012)と考えている。

RSE合計得点において、「低依存・高服従」群は、YG検査下位因子との有意な相関関係を示した因子数は、3因子(D(抑うつ性大)因子とC(気分の変化大)因子との間に負の相関、G(活動性)因子と正の相関)であり、「低依存・低服従」群の7因子と比べて少ない。これは、「低依存・高服従」群では、自尊心と内的準拠性が連動していない、自分が選択した行動によって自尊心が変動することが少ないことを示していると考えられる。

自尊心と内的準拠性である性格特性は、別次元のものとなり、自分が選択した言動に自尊心は影響を受けることが少ないと考えられる。「低依存・低服従」群の方が、自分が選択した言動が自尊心と関連していることが多いことになる。

前述のように「低依存・高服従」群は、親との親和性が高い群であるが、「低依存・低服従」群は、親への依存心・服従心が最も低い群である。自己形成は、自らの力で推し進めていく群と考えられる。これに対し、「低依存・高服従」群は、親との関係を維持しながら、自己形成を進めていく群と考えられる。親との関係を維持していることで自尊心は内在化され、言動とは連動しなくなっている。

4. まとめ

「低依存・低服従」群との比較において、SEの質に関して、「高依存・低服従」群と「低依存・高服従」群の特徴は明らかになったが、「高依存・高服従群に関しては、「低依存・低服従」群と類似したSEの質であることが示唆された。しかし、「高依存・高服従」群と「低依存・低服従」群が類似したSEの質を持つことは、理論的に理解できない。

今後、他の変数との相関関係から更なる検討を行いたいと考えている。

<引用文献>

・藤原正博 1981 自我同一性と自尊感情の関係 遠藤辰雄(編)アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版 85-89.

- ・加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究 28、336-340.
- ・三田英二 2000 Self-Esteemと社会態度に関する因子分析的研究 静岡県立大学短期大学部研究紀要 13-2、247-266.
- ・三田英二 2003 独立意識からみた女性の自己の発達 青年心理学研究、15、1-15.
- ・三田英二 2007 Self-Esteemからみた女性の独立意識－発達の観点から、青年期後期と成人期前期の比較－ 静岡県立大学短期大学部研究紀要 20-W-4、1-11.
- ・三田英二 2008 発達の観点からみた女性の親との心理的距離とSelf-Esteemの関係 静岡県立大学短期大学部研究紀要 21、37-48.
- ・三田英二 2012 発達の観点からみた女性の親との心理的距離と性格特性の関係（2）－「依存」か「服従」か、相関関係からの検討－ 静岡県立大学短期大学部研究紀要 26-W-1、1-22.
- ・辻岡美延 2000 新性格検査法－YG性格検査 応用・研究手引き－ 日本心理テスト研究所株式会社

付録1 独立意識尺度の因子分析結果（回転後）

（三田、2003を一部改変）

| | I | II | III | IV | V | 共通性 |
|--------------------------------------|-------|-------|-------|-------|-------|------|
| 6. 人の意見もよく聞くが、最終的には自分で決断できる。 | .740 | -.014 | -.031 | .036 | -.056 | .553 |
| 8. まわりの人と意見がちがっても、自分が正しいと思うことを主張できる。 | .712 | .046 | .016 | .294 | -.109 | .608 |
| 5. 生きることの意味や価値を自分で見出すことができる。 | .699 | .008 | -.257 | -.077 | .038 | .562 |
| 36. どうしたらよいか、自分で決心できないことが多い。 | -.661 | .139 | .276 | .278 | .275 | .686 |
| 4. 自分自身の判断に責任を持って行動することができる。 | .625 | -.125 | .026 | -.135 | -.059 | .429 |
| 35. 他人の意見や流行に、つい引き込まれてしまう。 | -.585 | .049 | .043 | .203 | .237 | .443 |
| 7. 生活の中に自分の個性を生かそうと努めている。 | .583 | .227 | -.345 | .115 | .108 | .535 |
| 10. 自分の意見を言えずに、相手に従ってしまうことが多い。 | -.570 | .190 | .222 | -.111 | .262 | .491 |
| 9. 小さなことでも、自分で決断することができない。 | -.519 | .026 | .186 | .120 | .216 | .366 |
| 22. つらい時、悲しい時に、親のことがまず頭に浮かぶ。 | -.035 | .831 | .051 | .002 | .059 | .698 |
| 20. 親といるだけで何となく安心できる。 | -.060 | .795 | .148 | -.067 | .021 | .662 |
| 24. 親は自分の心の支えである。 | .014 | .786 | .014 | .030 | .018 | .620 |
| 23. できることなら、いつも両親と一緒にいたい。 | -.014 | .783 | .026 | -.056 | .057 | .620 |
| 21. 困った時は親に頼りたくなる。 | -.141 | .714 | .149 | .010 | -.025 | .553 |
| 25. 何かする時は、親に助けをもらいたい。 | -.049 | .653 | -.078 | .260 | .312 | .600 |
| 33. 両親に対して自分のことを打ち明けて話す気がおこらない。 | -.143 | -.645 | .048 | .259 | .160 | .531 |

| | | | | | | |
|--|-------|-------------|--------------|-------------|--------------|------|
| 27. 親は何かにつけ、味方になってもらいたい。 | -.073 | .543 | -.086 | .256 | .382 | .519 |
| 14. 将来、どんな職業をついたらよいかわからない。 | .015 | .062 | .857 | .028 | .126 | .755 |
| 13. 自分の本当にやりたいことが何なのかわからない。 | -.194 | -.005 | .758 | .150 | -.010 | .635 |
| 3. 時分の将来の進路や目標を自分で決めることができる。 | .324 | -.121 | -.687 | -.023 | -.159 | .618 |
| 31. 両親について反抗し、あとで後悔することが多い。 | -.067 | .177 | .064 | .698 | -.180 | .560 |
| 30. 親や先生のいうことには、たとえ正しくても反対したくなる | -.010 | -.030 | .063 | .691 | -.098 | .492 |
| 28. 両親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになることが多い。 | .113 | -.325 | .110 | .575 | -.031 | .461 |
| 37. いっでも相手になってくれる友達が多い。 | -.290 | .113 | -.047 | .531 | .066 | .385 |
| 18. 親こさからえないで、言うとおりにになってしまいやすい。 | -.124 | .025 | .141 | -.033 | .748 | .597 |
| 29. 親の言うことには素直に従っている。 | .007 | .295 | .029 | -.329 | .637 | .602 |
| 26. 自分で決心できないときは、親の意見に従うようにしている | -.065 | .469 | .035 | .153 | .543 | .544 |
| 34. 親に対して自分の意見を主張したいが、自信を持ってない。 | -.267 | -.300 | .031 | .213 | .526 | .484 |
| 17. たとえ学校の成績が悪くても、人間として、ひけめを感じることは多い。 | .279 | .003 | -.110 | .037 | -.517 | .359 |
| 1. 自分の人生を自分で築いていく自信がある。 | .495 | -.014 | -.472 | -.159 | -.112 | .506 |
| 2. 人生で出会う多くの困難は、自分の力で克服することができると思う。 | .291 | -.023 | -.363 | -.248 | .079 | .285 |
| 11. 社会の中で自分の果たすべき役割があると思う。 | .466 | .119 | -.423 | .026 | .015 | .412 |
| 12. 自分の考えが変わりやすく自信をもてない。 | -.488 | .070 | .171 | .413 | .145 | .464 |
| 15. 自分の意志で、欲望や感情をコントロールする(かまんしたり、調節したりする)ことができる。 | .134 | .029 | -.155 | -.493 | -.246 | .346 |
| 16. 自分の考えや行動を抑えられたり、統制されたりすることには強い反発を感じる。 | .151 | -.097 | -.229 | .418 | -.034 | .261 |
| 19. 外から与えられたわくの中で生活する方が安心できる。 | -.148 | .133 | .481 | -.049 | .334 | .385 |
| 32. 大人に対してひけめを感じることも多い。 | -.081 | .116 | .259 | .446 | .304 | .378 |
| 二乗和 | 7.48 | 4.83 | 2.85 | 2.02 | 1.83 | |
| 寄与率(%) | 20.2 | 13.0 | 7.7 | 5.5 | 4.9 | |
| α | .850 | .876 | .809 | .619 | .680 | |

付録2 RSE の因子分析結果 (回転後)

(三田、2000を一部改変)

| | I | II | III | 共通性 |
|--------------------------------------|-------------|-------------|-------------|------|
| 2 私は時々、自分がてんでだめだと思う。 | .724 | -.152 | -.014 | .547 |
| 5 私にはあまり得意に思うことはない。 | .444 | -.358 | -.324 | .430 |
| 6 私は時々たしかに自分が役立たずだと感じる。 | .708 | -.133 | .022 | .519 |
| 8 もう少し自分を尊敬できたならばと思う | .595 | .287 | -.256 | .501 |
| 9 どんな時でも例外なく、自分を失敗者だと思いがちだ。 | .583 | -.312 | -.198 | .476 |
| 3 私は、自分にはいくつか見どころがあると思っている。 | -.169 | .597 | .382 | .531 |
| 4 私はたいいていの人がやれる程度には物事ができる。 | -.113 | .748 | .006 | .572 |
| 7 私は少なくとも自分が他人と同じレベルに立つだけの価値ある人だと思う。 | -.089 | .819 | .075 | .685 |
| 1 私はすべての点で自分に満足している。 | -.125 | -.003 | .745 | .570 |
| 10 私は自分自身に対して前向きな態度をとっている。 | -.044 | .195 | .738 | .585 |
| 二乗和 | 3.03 | 1.34 | 1.04 | |
| 寄与率(%) | 30.23 | 13.42 | 10.42 | |
| α ^{注2} | .658 | .667 | .430 | |

注1：RSEについては、アイデンティティの心理学（遠藤辰雄（編）1981 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版）p. 65に掲載された星野（星野命 1970 感情の心理と教育（一、二）児童心理 24, 7および8, 1264-1286, 1445-1477）の訳を使用した。

注2：本文中に記載した内的整合性係数（ α ）は、本論文で使用している調査データを用いて算出したものである。付録2で示している内的整合性係数は、三田（2000）が調査したときのデータである。異なるデータを使用しているため、内的整合性係数の数値が異なっている。

付録3 YG検査の下位因子

| 記号 | 解釈基準 |
|----|----------|
| D | 抑うつ性 |
| C | 気分の変化 |
| I | 劣等感 |
| N | 神経質 |
| O | 客観的—主観的 |
| Co | 協調的—非協調的 |
| Ag | 攻撃性 |
| G | 活動性 |
| R | のんき |
| T | 思考的内向—外向 |
| A | 服従的—支配的 |
| S | 社会的内向—外向 |

(2016年2月22日受理)